

## 雑誌『成功』の書誌的分析 —職業情報を中心に—

三上 敦史

学校教育講座（日本教育史）

### A Bibliographical Research of the “Seikou” (Success), Focusing on the Vocational Information

Atsushi MIKAMI

Department of School Education (Japanese History of Education),  
Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

#### はじめに

1902年創刊の雑誌『成功』は、明治後期～大正初期の日本において立身出世を目指す青年たちを読者として発行された。特に、サブタイトル「立志獨立進歩之友」が示すように、苦学生と地方青年、すなわち正規の学校階梯、なかならず旧制中学校から始まるエリート養成の系を進み得ない青年たちを主たる対象としていた点にきわだった特徴を持つ。

同誌は5年前の1897年に創刊された『実業之日本』と並び、都鄙を問わず読まれた。例えば、1910年に朝日新聞に連載された夏目漱石の小説『門』では、主人公・野中宗助が歯医者者の待合室で本誌を手にとる場面が描かれている。また、「一九〇五年頃の鐘紡中島工場（大阪）の読書室に、『太陽』、『実業之日本』、『工業之大日本』などと並んで、『成功』が備えられていた」<sup>\*1</sup>とのことで、相当な浸透ぶりであったことがうかがえる。

立身出世を目指す一般の青年層を読者とし、なおかつ人口に膾炙した存在であった本誌がいかなる記事を掲載し、どのように彼らの学びや進路選択をキャナライズしようとしたのかを分析することの教育史的な意義は大きい。近代日本の立身出世イデオロギーの実相を分析し、またその浸透過程を把握するためには不可欠の作業だといえよう。

同誌に関してなされた、主たる先行研究は以下の通りである。

- ①見田宗介（1967）「“立身出世主義”の構造」潮出版社『潮』1967年11月号
- ②竹内洋（1978）『日本人の出世観』学文社
- ③E.H.キンモンス（1981）[広田照幸・加藤潤・吉田文・伊藤彰浩・高橋一郎による邦訳の発刊

は1995]『立身出世の社会史——サムライからサラリーマンへ』玉川大学出版部

- ④雨田英一（1986）「村上俊蔵の生い立ちと思想形成——近代日本における競争と倫理——」東京大学教育学部教育史・教育哲学研究室『研究室紀要』1986年6月
- ⑤雨田英一（1988）「近代日本の青年と「成功」「学歴」」学習院大学文学部『学習院大学文学部研究年報』第35輯
- ⑥竹内洋（1996）『立志・苦学・出世』講談社現代新書
- ⑦菅原亮芳（1991）『「成功」教育ジャーナリズム史研究会編『教育関係雑誌目次集成 第三期・人間形成と教育編 第9巻』
- ⑧雨田英一（1992）「村上俊蔵の「成功」の思想——近代日本における修養思想の一形態——」日本教育学会『教育学研究』59（2）
- ⑨竹内洋（1996）『NHK人間大学 立身出世と日本人』日本放送出版協会

後述するように、刊行期間が15年とさほど長くはなく、当初は無名だった編集者が設立した零細な出版社により、特に有力なバックも持たずに刊行されていた雑誌であるにもかかわらず、相当数の先行研究がある。これだけでも歴史的な重要性をうかがわせるに十分であろう。

先行研究の中心となっているのは、竹内洋と雨田英一である。竹内は同誌の記事傾向や論調を概観することで、ノンエリート青年への立身出世主義の浸透過程を明らかにしようとしてきたのに対し、雨田は村上の思想の分析を切り口にして、同誌の性格それ自体を分析しようとしていることが相違点である。

これらの先行研究においても、ある程度、書誌的分

析は行われている。本論文ではそれらの内容を整理しつつ、必要に応じて新たに考察を行う。

## 1. 発行母体ならびに発行状況

本誌は村上俊蔵（濁浪）が設立した成功雑誌社（東京市本郷区駒込千駄木町50番地）により、1902年10月10日付の第1巻第1号（以下、1-1のように記載）から1916年2月1日付の31-2まで、少なくとも15年間にわたって刊行されたとみられる月刊誌である。

同社は官公庁・政党・教団・財界といった有力なバックを持たず、村上俊蔵が自宅に設立した、ごく零細な出版社であった。なお、本誌のほか、1906年5月に『探検世界』、08年5月に『殖民世界』を発刊しており、これらについても国立国会図書館をはじめいくつかの大学図書館に所蔵がある。

発売所は裳華房（東京市日本橋区大伝馬塩町11番地）である。

刊行期間が15年間であるにもかかわらず、最終巻が第31巻というのは、本誌の巻号の数字の振り方が独特なためである。号数は創刊号を起点に定期号・臨時増刊号を含めて数字を振るのだが、第6号まで進むと巻数が改まり、以後それをくり返すのが原則である（すなわち「第〇巻第7号」という巻号は存在しない）。

ただし、第3巻は3-5までしか確認できず、3-6は発行されたか否かを含めて不明である\*2。また、第30巻は30-3で終了して31-1へ進んでいる。これは後述するように、「強者主義」に基づく「大拡張」を行ったため、巻数を変更したものと考えられる。

この間、臨時増刊号は7-4（1905年9月15日付）から24-1（1912年10月10日付）までの間、半年に1回程度のペースで発刊されている。このため、ある年に発刊された1～12月号および臨時増刊号は、前後の年の発行分とあわせ、2～3巻に分かれて存在することになる。

ページ数（広告を除く）は、創刊号が50ページであり、以後もほぼ同程度を維持する。15-3（1909年）以降は約100ページとなるが、28-4（1915年1月1日付）からは再び約50ページに戻っている。その後、31-1の誌面改革以降は約160ページと激増している。

定価は、創刊号が10銭であった。以後、ページ数が倍増した15-3（1909年1月1日付）から15銭となるが、旧に復した28-4からは定価も10銭に戻っている。誌面改革が行われた31-1以降は18銭となったはずだが\*3、確認が取れない。

発行部数については、2-2（1903年5月10日付）に「発売部数何地に於ても第一位」、2-3（同6月10日付）に「数万部を増刷」、6-4（1905年4月1日付）に「一万五千の読者」、8-1（同12月1日付）に「一万五千の読者」、15-2（1908年12月1日付）に「発行部数東洋第一」

とある。雨田（1988）によれば、「同じく発行部数において『東洋第一の大雑誌』と自称した『太陽』（中略）の「十数万部」（第巻第26号、明治32年）と比べれば少ないが、『成功』と同様な性格の雑誌『実業之日本』が明治33年頃で3千部前後であったことと比較すれば、かなり多かった」という。

## 2. 保存状況

国立情報学研究所（NII）の検索システム「NACSIS Webcat」では1-1から30-3までの所蔵が確認できる。最大のコレクションがあるのは国立国会図書館で、4-2（1904年4月1日付）～30-3（1915年12月1日付）の所蔵（うち18-3は欠）が確認できる。同館に所蔵がない部分についてみると、1-1～3-5および4-1が東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター（明治新聞雑誌文庫）に、4-1および18-3は早稲田大学中央図書館に所蔵がある。

その先の31-1（1916年1月1日付）および31-2（同2月1日付）については、「NACSIS Webcat」に掲載がないものの、本誌の目次集成である教育ジャーナリズム史研究会編（1991）『教育関係雑誌目次集成 第三期・人間形成と教育編 第9巻 成功』に目次が収録されているため、発刊されたことは確認できる。しかし、同シリーズの『第33巻 解題・所蔵機関一覧』には両号の記載がなく、30-3で発行が終了したかのようになっているとあり、所蔵先は不明である\*4。

## 3. 発行の主旨

創刊号の「発刊之辞」には、以下のようにある。

今日の社会に要する人物は、巧言令色を以て人に接し、而も自ら保つ節操なき、所謂当世的才子にもあらず、蓬頭乱髮無礼無作法にして、好んで直言大語し、而も中に摯実の工夫を欠く、所謂東洋的豪傑にもあらず、只自ら助け自ら重んじ、自ら営為し、自ら勤勞し、自己の手腕を以て自己の運命を作り出す人物にあり

倩々案ずるに、国家は斯る人物の存在に因って興り、斯る人物の欠乏に因って衰ふ、之を以て欧米諸国人の意を此種の人物の養成に注ぐや深く、学者宗教家より、政治家実業家に至るまで、其著書に、其雑誌に、盛に之を奨励し、日も尚足らざるの觀あるなり

然るに翻って我国の現状を見は如何、彼の中村敬宇先生の西国立志編等、二三青年の爲めにせし著訳なきにあらざるも、其著書の乏しき、恰も茫茫たる沙漠に寸草をも見ざるの觀あり、殊に雑誌界に至りては滔々たる天下、只読者の顔色を損せざらんことを是努め徒に淫詞を刊し、此暗憚た

る天地に一道の光明を点するを思はざらんや、

雑誌成功は、只此要求を満さんが為めに発刊せんとする物なり、微力敢て天下を風靡するに足らずと雖ども、又独立独歩、明白に其所思を言ひ、其所信を断行するの点に於て、大に他に勝れるものあるを信す

すなわち、自助努力で「自己の運命を作り出す」志を立てた青年のために——そして、それによってもたらされる国家の発展のために——資することが発行の主旨であった。このことは終刊まで変化しない。

それが変化するのは29-6（1915年9月1日付）である。同号の巻頭記事「本誌の新旗幟「強者主義」宣言」は、以下の10項目を挙げた。

第一 余輩は欧州戦争の結果、世界人類の生存競争が一層猛烈激甚と為り、弱者を以て組織する国家は到底滅亡の外なきを信ずるものなるを以て、我が国民をして是等競争場裏の絶対的勝利者たらしめんが為め、茲に強者主義を唱導す。

第二 余輩は今日の社会に積極進取の気象に富みて自主的精神強く、堅実なる実識を有して時勢に明に、鉄の如き意志と鉄の如き体軀とを備ふる強者の養成を期す。

第三 今日の世界は空理空論を容さず。智力腕力の外に富力の増進を必要とするを以て、余輩は世界の競争場裏に於て富力の獲得者たるべき強者を盛に我国より輩出せしめん事を期す。

第四 今日世界の競争場裏に於ける勝利は、其国科学の発達に待つ所大なるものあるを以て、余輩は我國民の為に大に科学を尊重闡明するの気風を養成し、以て諸般の興国的事業に応用せしめん事を期す。

第五 我国の国を開きしより以来既に六十年、世は大正の御代と為りて、正に独創的文明の必要を感ずるの時代と為れり。余輩は我が国民をして今後益々博く知識を世界に需めしむると共に東西文明を融合して、更に一新機軸を出せる文明を建設せしめん事を期す。

第六 日本国民をして雄大なる国民として世界の表に活躍せしめんには、日本民族の根底に潜める優秀なる国民性の発達を計るの必要あるを以て、余輩は益々本邦道德の精髓を発達し、大和魂の培養發揮を期す。

第七 学生は未来を負ふて世界に立つ者、其志業の成敗利鈍は一国の興亡盛衰に關す。余輩は之が伴侶と為り、其品性の陶冶、学業の発達、卒業後の就職等に就き、能ふべきだけ有益なる実識を与ふるに吝ならざるべし。

第八 地方青年は国家の基礎たり。此基礎確実にして始めて日本国の隆昌を企図し得べきを以て、余輩は極力地方青年会及自治団体の発達を期す。

第九 世界の優勝国民は皆海外に向って活動を試む。此活動を試むる国民にして、始めて国運を興隆せしむるを得。然るに我國民は未だ海外に向って発展を試むるの方法を解せず。之を欧米の国民に比するに其績甚だ劣れるものあり。余輩は我国の前途を思ふて、深く之を慨し、我國民をして今後大に海外の富源に成功的活躍を行はしめん事を期す。

第十 雑誌『成功』は従来立志独立の伴侶として世に立ちしが、新時代の趨勢は、精神上物質上の強者を要求すること頗る急なるものあるより、余輩は盛に此主義の宣伝にも従事する事と為りぬ。然れども敢て従来の綱領を棄つるにあらず。今後の社会に必要な諸項は益々盛に之が宣伝に努力せん事を期するものなり。

30-2（1915年11月1日付）でもこの宣言は再び掲載されており、欧米列強との生存競争に勝ち抜く人材を養成するという新たな方針を徹底することに対する、村上の強い意志が読み取れる。

この宣言に従って大幅な誌面改革を行ったのは、31-1（1916年1月1日付）であった。しかし、上述したように、翌月の31-2（1916年2月1日付）を最後に、本誌の発行は確認できなくなる。

#### 4. 編集人並びに編集・刊行方針の変化

村上俊蔵の略歴は、雨田（1994）によれば以下の通りである。

1872年（明治5）静岡県引佐郡細江町気賀に生まれた。気賀の旗本近藤家の家臣の白井家の三男である。1878年気賀学校に入学、続いて豊橋の宝飯中学校に入学した。学資は叔父村上松太郎の支援による。1888年（明治21）東京の和仏法律学校（現在の法政大学）に入学したが、余儀ない事情で中途帰郷し、叔父の娘いそと結婚し、村上姓となった。1897年再上京して『学窓余談』『今世少年』の編集に携わった。そして1902年成功雑誌社を起こして、『成功』を創刊するのである。

また、竹内（1978）によれば、『学窓余談』（主筆・松島剛、1898年9月創刊）の編輯の手伝いをしていた当時、「O.S. Mardenの*Success*誌を読んで感銘を受けた」（同書、110ページ）ことにより、『学窓余談』の廃刊後、*Success*誌をモデルに刊行した雑誌が『成功』であるという。

その後の村上だが、竹内（1978）には、「『成功』の成功によってえられた富の大半を南極探検隊の援助のためにつかい、一九二四年一〇月二〇日、不遇のうちに死んだという」（同書、133ページ）とある。

なお、村上には雑誌の編集人としてよりも、1910年に白瀬轟（陸軍中尉）を隊長とする日本初の南極探検後

援会の発起人となり、同年から1912年にかけて派遣資金集めの中心となった人物としての方が、知名度が高いかもしれない。出身地の旧静岡県引佐郡（2005年に全域が浜松市に併合）の自治体史や郷土史家の手による研究でも取り上げられているようである\*5。悉皆調査すれば雑誌『成功』についても思わぬ史実が発掘できるのかも知れない。

次に、編集・刊行方針について。創刊号の「発刊之辞」に続いて掲載している「大旨」「綱目」は以下のよう

大旨

一、自助的人物の養成

綱目

- 一、自己の手腕を以て自己の運命を開拓する剛毅なる人物の養成を期す。
- 一、正義を重んじ新智識を求むる積極的人物の養成を期す。
- 一、職業の選択と修学の方法とに就き好指導者たらんを期す。
- 一、処世の法を示し成功の訣を知らしめんを期す。
- 一、苦学生の同情者を以て任じ、其精神に激励を与へんを期す。
- 一、都鄙青年間に行はるゝ悪風の一洗を期す。

「大旨」すなわち発行の主旨を実現するために「綱目」6点を挙げているのだが、その内容は2点ずつ3つの内容に分けられる。

まず最初の2点は、雑誌を通して養成すべき人物像である。編集にあたって心がけるべき目標ないしは理想と云ってよい。

次の2点は掲載記事の選定方針である。進路情報と処世術。それらに疎く、また渴望している者は誰か。正規の学校に在学しておらず、また情報へのアクセスに難がある者であろう。

そのことが、最後の2点、すなわち主たる読者層を苦学生と地方青年とする規定にかかっている。まさにこの点こそが本誌の特徴である。そして、そのことは15年に及ぶ刊行期間中、変化することはなかった。29-6で「強者主義」宣言を行い、発行の主旨を変更した際も、「従来の綱領を棄つるにあらず」と述べており、方針に変化はない。

5. 誌面構成

創刊号の誌面構成は表1の通りである。

また、記事ではないが、広告にも注目しておきたい。記事傾向に背馳するような広告は掲載しないだろうから。創刊号が掲載している広告は表2の通りであり、進

表1 『成功』(1-1)の構成

<p>立志 ○立志画家中村不折君 自助庵主人 ○文学博士根本通明翁苦学談 ○一億五千万円の富豪（バンダービルトの一生） 記者</p> <p>文苑 ○楠正成公東大寺の洪鐘を動かせし事 幸田露伴 ○失われたる羊（新体詩） 児玉花外</p> <p>史伝 ○大村益次郎翁の話 有地海軍中将 ○中村敬宇先生の平生 小塚空谷 ○米国大農業者立身伝 湖北散士</p> <p>修養 ○学業成功の要領 文学博士 井上哲次郎 ○品性修養表 ○成功的性質と失敗の性質 ○成功の秘訣 文学博士 村上专精 ○成功の秘訣 有地海軍中将</p>	<p>雑録 ○苦学の話 巖本善治 ○片々録 香川怪菴 ○尺牘三章 石井研堂 ○立志小説多額納税者 堀内新泉 ○貧生修学の便法 文学博士 井上圓了</p> <p>処世 ○小学教員立身伝 湖雲 ○成功の人失敗の人 西川光次郎 ○年給四千元の小児</p> <p>天下 ○喜憂録 村上濁浪 ○反響。海外異聞。彙報。 ○中村不折君の家庭。書齋の根本通明翁。英国留学中の中村正直先生。一億五千万富豪。年給四千元小児の肖像等美麗写真版木版十数個入</p>
---	--

表2 『成功』(1-1)掲載の広告一覧

<p>開発社：雑誌『実科教育』 国光社出版部：村上濁浪『鉄血宰相語録』、内務大臣官房編『明治国民亀鑑』、中村清蔵『新式銀行簿記学』、須田每六『銀行利用法』、ラヴレー（バルギー大学教授）著／寺内淳二郎（文学士）訳『奢侈亡国論』、甲秀輔『徳川の孔明』、山崎忠和『日露の英雄』、三輪田真佐子『女子の本分』、新泉堀内文磨『家庭の鑑』、笹川臨風（文学士）『少年武士道史伝第三篇本田平八』、堀内新泉『少女読本月の巻』、堀内新泉『家庭小説 女楽師』、女鑑編輯部『ひめかゝみ』、大町文学士『常磐午前』、国府犀東『静御前』 明治書院：堀江秀雄（開成中学校教諭）『中学作文教科書』 同文館：佐野善作（東京商業学校教授）『商業簿記教科書』、「商人文庫」（全十一編） 片山潜：雑誌『労働世界』 裳華房：長田偶得『徳川三百年史』、川上瀧彌（農学士）・森広（農学士）『はな』、新渡戸稲造（独逸哲学博士・米国文学博</p>	<p>士）『英文武武士道』『独文武士道』、裳華房編輯所『武士道評注及評論』、札幌農学校学芸会『札幌農学校』 三育社：『立身達志 独学自修策』 能楽館：偉人史叢編輯部『座右之銘』 春陽堂：『黄金世界』『当世活人画』『続当世活人画』『続々当世活人画』『名流の面影』 大倉書店：赤堀峯（庖治会本部教授）・安西こま子『庖治会日本料理法』、杉本新造（亀屋主人）『増補日用西洋料理法』、三輪田真佐子（三輪田女学校主）『女訓之栞』、和田垣謙三（東京帝国大学教授・法学博士）『新英和辞典』『新和英辞典』、登張信一郎（文学士）・大黒安三郎（医学士）・山田基『新和独辞典』、野村泰亨・中沢文三郎・阿部漸『仏和新辞典』、谷口秀太郎・近藤重石・渡辺醇之助『増訂独和辞典』、白坂哲（農学士）『実験養蚕と栽桑』、佐野彪太（医学士）『通俗療養法』、商業講習会『立志成功 致富商策』、落合直文『日本大辞典 ことはの泉』</p>
--	---

学案内書の類は皆無である（肩書等は広告中に記載のあるもの）。

また、1-2（1902年11月10日付）からは「記者と読者」と題する修学・就職に関する質疑応答欄が始まる。雨田（1988）はこの欄の内容を分析したものであるし、キンモンス（1981）も日露戦争を挟んで、寄せられる質問内容が大きく変化したことに注目している。すなわち、「戦前の相談の多くは気宇壮大なものだった」が、「戦後になると質問内容は次第にテクニカルになり、いわば、ささやかな立身に関するものになっていった」（同書179ページ）。

これ以降、定期号は若干の欄の追加・廃止・改称があるが、18-4（1910年5月1日付）以降は欄構成の形を取らなくなる。目次をみると、彙報の形で「受験案内」は残るが、他は特に欄ごとにまとめられず単に並べられている。この変化の理由は定かでない。以後、欄構成はないままの形が30-3まで続く。

30-3（1915年12月1日付）の「雑誌『成功』大拡張予告」と題する記事は、誌面改革以降の見通しについて、以下のように述べる。

明治の後半に於て一大思潮を造り立志独立の旗を翻して天下を風靡せし雑誌『成功』は大正御即位後の第一年に於て更に一大拡張を行ひ天下に見ゆるあらんとす。此拡張は御即位後の第一年に於て

行ふものなるを以て大正の御代を益すべき最も有益多趣味の材料を選定するに苦心し明年元旦以後巻頭写真版を増加して八ページと為し紙数を激増して菊版百六十頁と為し、其半部に於て盛に『古今東西の偉人』に関する記事を満載するあらんとす。思ふに地球小なりと雖も東西両半球の大陸を包蔵し史籍狭しと雖も上下六千載の歴史を有す。其間に隠見出沒するの偉人豪傑英雄才媛豈伝ふるに足る者なしとせんや。元旦号以後の本誌が如何に光采燦爛として趣味豊富なるべきやは此新計画によりても明白なるが、更に本誌は従来の記事に大刷新を加へ新時代の潮流を指導するに意を用いたれば此点に於ても破天荒の福音に接すべし、刮目して俟て。

これによって31-1以降、総ページ数は約160ページと倍増し、従来の内容（約90ページに増大）に「偉人欄」（約70ページ）を付加した誌面構成となった。以下、31-1の誌面構成を表3に示す。既に同種の記事がいくつもあるにもかかわらず、さらに「偉人欄」でダメを押している印象である。確かに「偉人」の記事を「満載」したといえるだろう。

ただし、翌月の31-2は特集「豊太閣外征号」で特別構成となっており、「偉人欄」はない。そして、それが発行が確認できる最終号である。

表3 『成功』（31-1）の構成

<ul style="list-style-type: none"> <li>●巻頭の辞</li> <li>●明末の英雄顧炎氏 文学博士 幸田露伴</li> <li>●大正時代に日本を双肩に担って立つ人物 石川半山</li> <li>●大正青年と研究時代 総理大臣 伯爵 大隈重信</li> <li>●人生快樂論 前農商務大臣 貴族院議員 仲小路廉</li> <li>●世界は今何を為し居る乎 湖北散士</li> <li>●湯河通信次官立身伝 自助庵主人</li> <li>●現代名士回答 大正時代に日本人の為すべき事業             <ul style="list-style-type: none"> <li>●日支の攻守同盟 菊地謙次郎</li> <li>●日支親善 青柳篤恒</li> <li>●司法部の革新 今村力三郎</li> <li>●国立図書館の設立 和田万吉</li> <li>●大日本国歌 菊池晚香</li> <li>●統一と整理 石井研堂</li> <li>●裁判の改良 笠原文太郎</li> <li>●国字の改良 松島剛</li> <li>●海事研究倶楽部 山科礼蔵</li> <li>●天祖の敬慕 広池千九郎</li> <li>●領土内の発展 矢津昌永</li> <li>●憲政自治の妙用 下田次郎</li> <li>●海に対する知識 松波仁一郎</li> <li>●希望五箇条 石川半山</li> <li>●仏教の信仰 高島米峰</li> <li>●科学の応用 鈴木梅三郎</li> <li>●真の基督教国民 山室軍平</li> <li>●明治事業の完成 早川千吉郎</li> <li>●人種問題の解決 永井柳太郎</li> <li>●東洋の盟主たる帝国 副島八十六</li> <li>●教育調査会の必要 中島半次郎</li> <li>●立憲的資質の涵養 田川大吉郎</li> <li>●社会問題十項 安部磯雄</li> </ul> </li> <li>●長男と舎弟との職業選択法 安田家総理 安田善次郎</li> <li>●海外発展の精神教育 農学博士 法学博士 新渡戸稲造</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●人生五十年（不治の病を得し後の一大告白） 町田柳塘</li> <li>●現世界の変局に対する青年の覚悟 参謀本部編修官 長瀬鳳輔</li> <li>●画家としての大文豪ユーゴー 山川無涯</li> <li>●未来世界と交通する英国大学者オリバー・ロッヂ氏 松村介石</li> <li>●二十円の資本より百万円の大商人となりし平野幾三郎君 岸弘毅</li> <li>●地方青年立身法 農学博士 横井時敬</li> <li>●大戦後の有望事業露領西比利亜の行商 新視察者 鈴木勝任</li> <li>●余が中等教員試験受験記 合格者 安藤千代造</li> <li>●満洲の農業は何程の利益ある乎 農商務技師 木下彌八郎</li> <li>●新刊紹介 偉人欄             <ul style="list-style-type: none"> <li>●豊太閣の世界統一理想 長田偶得</li> <li>●日蓮聖人佐渡遺跡巡覽記 鷺尾順敬</li> <li>●沢庵和尚物語 文学博士 辻善之助</li> <li>●宗教家としての加藤清正 僧都 小林仁海</li> <li>●亞歴山大王青年時代画伝 画伝子</li> <li>●赤穂義士堀部彌兵衛実譚 陸軍教授 西村豊</li> <li>●時勢の指導者福澤諭吉翁 慶應義塾大学長 鎌田栄吉</li> <li>●明治奇人浅田宗伯 中村東作</li> <li>●偉人特長研究の心得 文学博士 井上哲次郎</li> <li>●身体に現れたる偉人の標徴 文学博士 医学博士 富士川游</li> <li>●新に発見されたる那翁流竄日記 高田大観</li> <li>●大哲人ショーペンハウワー女性観 南陽子</li> <li>●剣道名人大日本武徳会範士高野氏対面録 記者</li> </ul> </li> <li>●口絵             <ul style="list-style-type: none"> <li>●外宮御親謁の 聖上陛下</li> <li>●衣冠束帯の首相大隈重信公</li> <li>●高田文相夫妻の肖像</li> <li>●維新前長崎留学生と其教師</li> <li>●那翁エルバ島隠退の光景</li> <li>●古代アイヌ人日本本土に移住光景</li> <li>●豊太閣木像</li> <li>●英国首相アスキム氏</li> </ul> </li> </ul>
--	---

## 6. 執筆者の特徴

執筆者は、政官財界あるいは教育界の著名人が目白押しである。主筆・村上俊蔵も、「村上濁浪」の名で多くの記事を執筆している。また、雨田（1986）によれば「自助庵主人」も村上である。

なお、創刊号では、「発刊之辞」「大旨」「綱目」に続いて「賛成員」を掲載している。その名簿によれば「特別賛成員」が6名、「名誉賛成員」が29名である。彼らは単なる名義貸しではなく、記事も執筆している。氏名は表4の通り（学位・所属等は記載のママ）。

## 7. 記事傾向

### (1) 職業情報について

竹内（1978）がいうように「教唆雑誌」たる本誌の場合、職業情報を論ずることは難しい。ある記事が職業情報であるか否かについて、明確な分類を行うことが不可能に近いからだ。

例えば、11-1（1907年2月1日付）をみよう。「職業案内」欄の「外交官と為る方法」、「実業」欄の「素人の開き易い商店」が職業情報であることは疑いない。

それでは「立志」欄の「陸奥宗光君立身伝」、「雑録」欄の「陸軍士官学校生活」はどうか。直接的には成功を遂げた人物の半生記であり、陸軍将校を養成する官費学校として名高い陸士の紹介記事である。しかし、それらはまた、官吏・政治家、陸軍将校の職業案内と意識して読まれることも多かろう。明治初期とは異なり、独学で中学校卒業程度の学力を身につければ、文官任用のための「普文」（普通試験）で官吏、専検（専門学校入学者検定試験）と陸士の入学試験を経ること

で陸軍将校というように、上昇のシステムは可視的な時代なのである。同様に「海外活動」欄の「南米伯刺西爾有望事業」も、新天地での就業を促す職業案内として読まれよう。

このように、職業情報と限定していなくても職業情報としての機能を果たす記事は多いということをかじめ念頭に置いた上、まずは日本内地限定で、具体的な職業の内容・発展性などについて言及した記事（いわば狭義の職業情報）だと判断されるものの登場頻度を数えてみた。それが表5である。

指摘できることの第一は、商業が中心であることである。離村・上京が必ずしも必要ない職業としては、それが最右翼であろう。工業・芸術家・農業が多いことも同じ文脈で理解できる。

第二に地方在住のままでも就ける職業に限らず、離村・上京が必要な職業も幅広く網羅されていることである。しかも、大正期以降の受験雑誌によくみられる官公庁の傭人・雇員採用試験や、給与を受けながら学べる官費学校ではなく、高等文官・中等教員・医師・弁護士などが多い。これらは中等以上の学歴がなくても受験・取得できる職種・資格であることは確かだが、前段階として専検など中等段階の学力を保証する検定試験に合格することや、普通文官・小学校教員の資格を取得することが必要であり、その上で正規の学歴を持つ者たちに伍して試験を受けなければならない。正規の学校階梯を進めなかった者にとっては相当な難関である。雑誌を売るための方便といったことにいったん目をつぶるならば、みだりに上京せず地方にあって成功を求めよ、さもなければ「出すぎた杭」になってみよ、というメッセージともうけとれる。

第三に、軍人、すなわち軍学校や志願兵に関する記

表4 特別賛成員・名誉賛成員の構成

特別賛成員：幸田露伴、巖本善治、徳富猪一郎、村上專精（文学博士）、井上圓了（文学博士）、志賀重昂
名誉賛成員：加藤弘之（文学博士）、海老名弾正、辻新次（帝国教育会長）、有地品之允（海軍中將）、内藤耻叟、井上哲次郎（文学博士）、丹羽清次郎（東京青年会幹事）、坪井正五郎（理学博士）、元良勇次郎（文学博士）、野中至、和田垣謙三（法学博士）、根本通明（文学博士）、神田乃武（男爵）、松村任三（理学博士）、遅塚金太郎、大森房吉（理学博士）、石井民司、田中稲城（帝国図書館長）、肝付兼行（海軍中將）、鎌田栄吉（慶應義塾長）、松島剛、郡司成忠（報効義会長）、松村介石、佐藤正（陸軍少將）、香川悦次、小西信八（盲啞学校長）、石川倉次（盲啞学校教諭）、中村正修、磯部彌一郎（国民英学会長）

表5 職業情報の登場頻度順（日本内地で10位まで）

順	件数	職業
1	140	商業（貿易商、実業家、荒物屋、売薬業、料理店、下宿屋など）
2	43	官公吏（高等文官、普通文官、外交官、税関職員、警察官など）
3	37	教員（小学校教員、中等教員）
4	33	工業（人力車製造業、工業家、工業技師、工業技手など）
5	32	芸術家（画家、美術家、工芸家、鍍金家、能楽師など）
6	26	作家（小説家、文学者、歌人、俳人、作詞家など）
7	22	医師
8	18	農業（農業、酪農業、林業）
9	15	軍人（陸軍、海軍）
10	11	学者

事は少ない。経済的に恵まれない青年にとってオルタナティブとしての進学かつ就職先が軍であったことはよく知られているが、そこへの言及がさほどないということには奇妙な感じも受ける。職業軍人となることは離村を伴うため「成功」の概念には合致しなかったのか、と。しかし、立身出世を果たした軍人の紹介記事・自伝などは頻繁に掲載されており、必ずしも軍人という進路を軽視しているわけではないことには注意が必要である。むしろ、本誌の読者からすれば常識であろうから、あえて記事にしなかったとみるべきなのかもしれない。

次に、職業情報の一種である海外情報については、別途、考察が必要だろう。本誌に登場した海外情報は、表6ようになる。

当初はアメリカ一辺倒で始まった。その後、創刊の2年後、第3巻の発行途中に日露戦争が勃発して以降、ロシア極東、中国・満洲、朝鮮など、関係する国・地域の記事が増加する。終戦は第7巻の発行途中にあたるが、これ以降は、ロシア極東が減少し、かわって中

南米、南洋の記事がみられるようになる。

日本の版図に目を転じると、意外なほど記事が掲載されていない。樺太・台湾はほとんど注目されておらず、朝鮮も領有以降は記事が減少している。

なお、29-6の「強者主義」宣言、30-1の誌面改革以降も、海外情報のありように大きな変化はみられない。

(2) 勉学情報について

苦学生・地方青年とくれば、「上京して夜学校へ」といった論調になるかと思いきや、そうした匂いはほとんど絶無といってよい。

例えば、1-5（1903年2月10日付）掲載の徳富猪一郎「地方青年と夜学校」は、「近来地方の青年が非常に奢侈に流れ、都会化して来たのは最も憂ふべき事である」と書き始め、西洋諸国のように教会・共励会といった機関のない日本では、「上州甘楽郡の会」や「埼玉県の青藍会」のように「各地方に夜学校を設け、倶楽部を開き、青年が相集りて書を読み、文を作り、又時々良師を聘して、講習会を開く」ことがよいと述べ

表6 各巻ごとにみた海外情報の登場頻度（日本領を含む）

巻	米州						欧州		アジア・オセアニア									
	アメリカ	※ハワイ	カナダ	メキシコ	ブラジル	ペル	欧州各国	ロシア	ロシア極東	樺太	中国・満洲	朝鮮	台湾	ジャワ	暹羅	フィリピン	南洋	豪州
1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
3	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
4	3	-	-	-	-	-	-	1	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
5	3	1	-	-	-	-	-	-	2	1	5	7	-	-	-	-	-	-
6	2	1	-	-	-	-	-	-	4	-	4	2	-	-	-	-	-	-
7	3	-	-	-	-	-	-	-	1	2	7	9	-	-	-	-	-	-
8	5	1	-	-	-	-	-	-	-	-	2	5	-	-	1	-	-	-
9	7	1	-	-	-	-	-	-	1	-	4	2	-	-	-	-	-	-
10	3	-	-	-	1	-	1	-	-	-	1	1	1	-	-	-	-	-
11	3	1	-	-	1	1	1	-	3	1	1	2	-	-	-	-	-	-
12	4	-	1	2	-	-	3	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-
13	3	-	-	3	1	-	1	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-
14	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
15	3	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	1	-	-	-	2	-	-
16	2	-	-	1	-	1	-	-	-	1	2	3	-	-	-	-	-	-
17	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-
18	1	1	-	2	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
19	2	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	2	-
20	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-
21	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	2	2
22	3	-	-	-	-	-	1	-	-	1	8	2	-	-	-	-	-	-
23	2	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	2	1	-
24	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
25	2	-	-	-	1	-	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	4	-
26	2	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
27	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
28	2	-	-	-	-	-	2	-	-	-	30	-	1	-	-	-	3	-
29	-	-	2	2	-	-	-	-	-	-	3	1	1	-	-	-	2	-
30	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-
31	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
計	71	7	3	13	5	2	17	1	16	8	80	43	5	1	1	4	19	2
	101						18		176									

※台湾は創刊時、樺太（サハリン）は第7巻、朝鮮（韓国）は第21巻から日本領に。  
中国・満洲の第28巻の数字は、28-1（「支那富源号」）の25本を含む。

る。国策に則ったのかどうかは不明だが（ちなみにこの1903年、蘇峰は弟の蘆花から「告別の辞」を書かれる）、都会の夜学校へは行くな、地方にあって夜学会を開けという主張は、同誌の基本的な論調と軌を一にしている。

無論、上京して苦学すること自体を直接的に悪だともでは述べない。ただ、記事として取り上げる学校は、多くは入学にあたって激烈な試験を伴わない私立の中等・高等教育機関であり、どう志を立て、どうやりぬくか、それについて誰の生き方に学ぶか、といった精神論が中心にきている。54（1904年10月1日付）からは「雑録」欄で「苦学法としての〇〇」を連載し、牛乳配達、新聞配達、砲兵工廠職工、学校教員、人力車夫など、進学案内書などと変わらぬ内容の苦学情報を提供する。

ただし、受験技術をどう磨くか、競争倍率はどれほどか、といったことは関心事ではない。キンモンス（1981）がいうように、「記者と読者」欄ですら「入学競争率を質問した読者に対しては、本当に成功を志す

者はそのような質問はすべきでない、といった具合」である。

ただし、日露戦争を境とする読者の意識の変化に伴い、そうした基本方針は微妙に変化せざるを得なくなった。特徴的なのは、9-3（1906年6月1日付）から登場する「受験界」（号により「受験案内」「学校案内」など）欄である。判検事試験、外務書記生、文検、高文、医術開業試験といった高等教育水準の検定試験から始まったこの欄は、やがて「東京諸商業学校案内」「普通文官登用試験案内」「職業としての小学校教員」のように中等教育水準の学校・検定試験にも範囲を広げてゆく。キンモンス（1981）がいうように、「日露戦争後、雑誌『成功』は、中等・高等教育の代替を求め、そこから立身の機会をつかもうとする青年のためのガイドブックの色彩を強めていった」（同書、179ページ）ことは否めない。

以下、表7には、勉学情報の登場頻度を示す。職業情報と同様、29-6の「強者主義」宣言、30-1の誌面改革以降も大きな変化はみられない。

表7 各巻ごとにみた勉学情報の登場頻度

巻	高等教育段階										中等教育段階			その他				
	学 校			文官任用			資 格			陸海軍学校	外国学校	学 校			普文・専検	各種受験案内	個別の学問	夜学会など
	大	高等専門	私学	高文	外務関係	司法関係	中等教員	医師	薬剤師			中	実業学校	その他				
1		1																1
2		1				1					1							
3											1							
4											1							
5			2	1				1									2	1
6		4			2	2	2	1						1			3	
7		1	2			2	1	1						1			2	
8		1		1		2	1	1			1							
9		3		1	1	1	2	1						1			3	
10			1		1						1		1				2	1
11		1					2			1	1						1	
12		1	1								1		3		1			
13	1	2	2											1				1
14				1			1				1		2	1			6	
15		3		1			1	1			1		2		1	1	1	
16		1								1		1			1	4		
17		2		1		1				2				1		4	2	
18	1	5				1							1			5		
19		2	1	1	1											5		
20		2														5		
21		1	2								1		1			5	2	
22	1		1	1							1		1	1		3	2	
23												1		1		5		
24			1			1										5		
25										1						2	6	
26		1	1	1											1	4		
27			2	1			1								1	6		
28					1	2	1									6		
29		1	1					1					1		3	6	1	
30															1	2		
31															1			
計	3	33	17	10	6	13	12	7	1	5	11	9	6	10	11	72	28	3
		53			29			20					25					



### (3) 生き方情報

職業情報・勉学情報と同様に、主眼は地方における「成功」と読める。積極的に離村・上京を勧めるような記事はない。また、29-6の「強者主義」宣言、31-1の誌面改革による変化もみられない。

興味深いのは2-6（1903年9月10日付）の「小官吏に甘んずる勿れ」のように、一見すると苦学して帝大、高文を目指すべし、というタイトルにみえる記事でも、そうした方針は徹底されていることである。まずは「本年文科大学の卒業生中、地方に出る者は別として、東京に留る者の最高給者は月俸三十円とは新聞の伝ふる所、三十年の学、幾千円の学資、而して堂々たる其結果僅に三十金とは、ヨシ物質は論ずるに足らずとするも、情なき次第にあらずや」と、帝大卒業者を槍玉に挙げる。そして、「是ばかりの俸給に甘んじて小官吏など成り終らんより、漠々たる亜米利加の野、人の来るを埃ち、支那の陸我邦人の開拓を待つ、男兒腕を振ふは正に此処、一衣一笠、遠遊の途に上るべし」と、海外移民のすすめになってしまうのである。読者としては肩すかしを喰らうとともに、帝大卒業者でも満足な職業が得られるわけではないことを知り、地方青年として生きるか、海外移民かが正しい選択だと考えるのではなかろうか。

また、この記事に続く「弁護士試験落第者奮起せよ」も、落第者に再受験へ向けての奮起を促すのではない。「若し卿等が法律に従事する丈の熱心さを以て、海外にあって働かば、卿等は必ずや、若干の成功を得ん、(中略)余輩は首を揚げて此人々の大陸の一方を睥睨せんことを望む也」と、やはり海外移民のすすめになってしまうのである。

以上のことを概観すれば、「地方でもできる職業（農業、商業、工業、芸術家など）に目を向けよ。あえて地方を離れる者は、日本周辺を中心とする国・地域への海外移民を考えよ。さらに、お勧めはしないが苦学生を志す者については、命懸けで高等教育を目標に掲げよ」ということになるだろう。

## 8. 廃刊・終刊について

冒頭で述べたように、目次集成によれば31-2までは発刊されたことが確認できるが、目次を見る限り、廃刊・終刊にあたっての挨拶に相当するような記事は見つからない。実際にはそれ以降も続いていた可能性があり、廃刊・終刊の時期は正確には不明である。これが実際に最終号だとするならば、誌面改革が読者に受け入れられず、売れ行きが悪化して資金繰りがつかなくなったとか、村上の個人的な事情によって突如廃刊・終巻といった突発的な事情があったのであろう。

## おわりに — これからの課題について —

本研究は、菅原亮芳を中心とする近代日本のキャリアデザインと教育ジャーナリズムの関係史を明らかにする共同研究の一部であり、今後、さらに研究を進めていくものである。よって、ここではこれからの課題について述べておきたい。

本誌については、既にいくつもの先行研究がある。しかし、分析され尽くしているわけではない。それらはいわば「雑誌を利用した研究」ととどまっている。

例えば、本誌と同時期に刊行された各種の出版物——地方在住で必ずしも経済的に恵まれない青年を対象にした出版物という意味で、進学案内書や職業紹介のための図書、一般の新聞・雑誌など——の内容を比較分析するとか、同じ発行母体の手による『殖民世界』『探検世界』の論調と重ね合わせるといった形で、本誌の性格に迫る作業は手がけられていない。日清・日露戦間期から大正初期に至る15年間を通観し、掲載記事を詳細に分析する作業を通じ、本誌の全体像を解明することが今後の課題であらう。

### (注)

- \*1 竹内洋（1978）『日本人の出世観』学文社、113ページ。
- \*2 3-5は1904年2月10日付、4-1は同3月3日付なので、月刊誌としてのペースは守られている。ただし、臨時増刊号を発行することもあったので、3-6も存在した可能性は残る。
- \*3 30-3（1915年12月1日付）の「雑誌『成功』大拡張予告」にその旨、予告あり。しかし31-1以降は目次しか確認できないので、実際の定価は不明。
- \*4 編者（樽松かほる）に照会したが、調査から相当時間が経過しており、今となっては不明とのことであった。
- \*5 例えば、市原正恵（2002）「明治青年の立身出世——村上瀧浪（俊蔵）の『成功』——」明治維新史 談会『維新史談』第32号。同会は静岡市で活動している。

※本研究は、文部科学省科学研究費補助金（2007～2010年度、基盤研究(B)）「近代日本人のキャリアデザインの形成と教育ジャーナリズム」（研究代表者：菅原亮芳、研究課題番号：19330177）による研究成果の一部である。

（2011年9月14日受理）